

6月8日 大熊由紀子教授

第8回 ボランティアとして、官僚として、審議

会委員として～体験として見えてきたもの～

東京大学教授・日本福祉大学客員教授

後藤芳一さん

公) 共用品推進機構 (株)タカラトミー

星川安之さん

保健医療学専攻 医療福祉ジャーナリズム分野
12S3048 藤原瑠美(八鳥 Hattori)

6月7日の朝、犬の散歩をしながら、夫に「どうして“手話のディスプレイ”を和光のショーウィンドウですることになったの」と聞くと、夫は「セイコーエプソンのデザイナー、谷川君が、若い女性を連れてきたんだ。完成したディスプレイを見て女性が涙ぐんでいたのを良く覚えているよ。こちらもそれを見て、感激したもんだから」と言った。

昨日の大学院の授業の講師は、後藤芳一さんと星川安之さん。懇親会の席でひょんなことから、お二人が「和光で手話のディスプレイをしてもらいました」とおっしゃるのを聞いて、90年代のことをタイムマシンに乗ったように一気に思い出した。



1997年10月に「バリアフリーは銀座から」というイベントがあり、私の夫は「手話劇場」と名づけたショーウィンドウデザインを手がけたからだ。手話は、I love you ♪と道行く人に語りかけている。

散歩から帰ると、夫はさっそく本棚のファイルから、E&Cプロジェクトの倉嶋果林さんという女性の達筆なお礼状と「手話するマネキン。『銀座の顔』で愛をささやく」という北海道新聞の記事の切り抜きを取りだした。

倉嶋さんの手紙は心がこもっていた。

「初めて、あのショーウィンドウを目にしたときの感動は今でも忘れません。普段、私たち、聴覚障がい者が使っている手話に比べると、和光のショーウィンドウでは、まるで、マジックにかかったような上品な手話となっており、思わずもれる溜息……。パープルとグリーンのコントラストに、ゴールドが効いて、夜のライトアップで更に美しく輝く・・・」と光景が浮かぶような文章が書かれている。

星川さんも「紫の衣装をまとったマネキンを見た時は、イベントの準備で疲れ果てていたにもかかわらず、心が震えたのを覚えています」と書いてくださり、後藤さんも「地下鉄を出て近寄って行って、見上げたら、上のほうに、ワッと目に入ってきて、とても感激した感覚が、まだよく覚えております」というメールをくださった。

星川さんによると、筑波技術大学の学生だった倉嶋果林さんは、結婚なさり、今は中学生の男の子のお母さん。当事者からの提案をなさっているそうだし、さらに不思議な「えにし」。

なんと、ゆきさんからは、2004年の「えにしの会」に、倉嶋さんから松森さんと結婚改姓した果林さんは登壇なさっていたとうかがった。

右の本が弱視の優子さんと果林さんの共著。



共用品とは、障がいがあってもなくても、ともに使える製品やサービスという。1991

年、こんな素晴らしい発想を企業に働く人たちが企業間のバリアを取りはらって集まり、頭を働かせていたとしたら、何てすてきなことと思った。

「ショー(ウィンドウ)ほど楽しい商売はない」が口癖の77歳の夫であるが、今年3月で札幌のJRタワーの仕事から引退を決意した。自分で決めたのに、「しまった。まだやりたかった」と後悔し、いよいよのない喪失感を味わっている最中なので、皆さんから、どんなに勇気をいただいたらう。

